



THE FORUM ON THERMALISM IN JAPAN

健康と温泉フォーラム 三朝

温泉を活用した 医療と地域の連携

2008年11月4日(火)～5日(水)

於：ブランナールみささ 会議室

鳥取県東伯郡三朝町三朝 388 - 1

主催／

岡山大学病院三朝医療センター

NPO 法人健康と温泉フォーラム

NPO 法人ラドン温泉医療三朝会議

三朝町

CONTENTS

ごあいさつ	森田 潔 (岡山大学病院長) —————	1
	三友 紀男 (NPO 法人健康と温泉フォーラム会長) —————	2
	吉田 秀光 (三朝町長) —————	3
事例報告 - 1 「温泉病院と地域連携—三重県四日市市」		
	川村 陽一 (医療法人社団主体会理事長) —————	4
事例報告 - 2 「温泉病院と旅館の連携—宮城県鳴子温泉」鳴子温泉の湯治文化に基づく温泉療養プラン		
	成川 弘治 (大崎市民病院鳴子温泉分院院長) —————	6
事例報告 - 3 「長期滞在型リトリートの杜事業コンソーシアム」～産・官・学の好ましい「三角関係」		
	小山 芳久 (山梨県北杜市コンソーシアム代表) —————	8
事例報告 - 4 「三朝温泉活性化の取り組み研究」		
	大野 正人 ((財) 日本交通公社研究調査部研究主幹) —————	10
パネルディスカッション「温泉を活用した医療と地域の連携」		
コーディネーター	合田 純人 (NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事) —————	11
パネラー 「温泉大国・日本を世界の温泉治療のメッカに」		
	小嶋 光信 (両備ホールディングス株式会社社長) —————	13
「三朝町における医療と地域の連携」		
	吉田 秀光 (三朝町長) —————	14
「医療機関の立場で 三朝温泉における期待と課題」		
	光延 文裕 (岡山大学病院三朝医療センター長) —————	15
「医療と温泉」		
	御船 秀 (三朝温泉旅館協同組合理事) —————	17
参加者コメント	—————	18
総括	清水 信義 (NPO法人ラドン温泉医療三朝会議理事長) —————	20

後援 鳥取県、三朝温泉旅館協同組合、三朝温泉観光協会、三朝町商工会、鳥取県中部医師会、
日本温泉気候物理医学会、日本温泉療法医会、(財)とっとりコンベンションビューロー、
新日本海新聞社、山陰中央新報社、読売新聞鳥取支局、朝日新聞鳥取総局、産経新聞鳥取支局、
毎日新聞鳥取支局、日本経済新聞鳥取支局、

協賛 両備裡園記念財団

ごあいさつ



森田 潔
岡山大学病院長

このたび、岡山大学病院三朝医療センター、NPO 法人健康と温泉フォーラム、NPO 法人ラドン温泉医療三朝会議、鳥取県三朝町の共催で「温泉を活用した医療と地域の連携」と題してフォーラムを開催する運びとなりました。

近年、予防医療、地域医療、高齢者医療は医療の中でのキーワードであり、温泉医療はこれらすべてを包含する大きなポテンシャルを持っているといえます。日本でも古来より社会が認めてきたこの温泉療法も、近代医学の中でその位置付けが小さくなりつつありましたが、今この価値を再認識する 때가きていると考えられます。

岡山大学は、昭和 14 年に三朝に温泉医学研究所を開設して以来、規模は縮小されたものの半世紀以上にわたって温泉医学研究と温泉医療の提供をしてきました。いまや、国立大学では雄一の温泉医療施設でありその重要性はますますまさに高まっているといえます。岡山大学病院としても、今後三朝におけるラドン温泉の医学的、科学的な研究をベースに、地域医療、予防医療、高齢者医療に大きな役割を果たしていく予定であります。残念ながら、現在の三朝医療センターの建物は老朽化しておりアメニティーの面では満足のいくものではありません。現在、病棟施設の全面改築を目指して経営努力を重ねているところであります。

このたびは、平井鳥取県知事の基調講演を始め、全国の温泉医療に取り組んでおられる地域の代表者の方々、また小嶋両備ホールディングス社長、吉田三朝町長様かたがたのパネルディスカッションを通して、温泉医療を核とした地域連携、地域活性の目指す方向が見つかるものと期待をしております。

このフォーラムが、実り多い有益な情報を皆様に与えていただけることを祈念してご挨拶とさせていただきます。

ごあいさつ



三友 紀男
特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム会長

仙台社会保険病院名誉院長（専門はリュウマチ性疾患の臨床と病理）昭和42年3月東北大学医学部卒業、43年東北大学内科助手、50年同講師、昭和53年国立鳴子病院（現在の大崎市民病院鳴子温泉分院）内科医長、東北大学医学部臨床教授、昭和57年東北厚生年金病院リュウマチ膠原病内科部長、平成11年同副院長、平成14年4月仙台社会保険病院病院長、平成18年4月同名誉院長。平成20年5月第73回日本温泉気候物理医学会会長。

健康と温泉フォーラム三朝「温泉を活用した医療と地域の連携」の主催者の一人として、一言ご挨拶申し上げます。本日、健康と温泉フォーラムが、ここ三朝温泉で、開催され、全国からご出席いただきました皆様に対し厚く御礼申し上げます。又、本フォーラム開催に向け、同じく主催者としてご支援いただきました、岡山大学病院三朝医療センター、NPO法人ラドン温泉医療三朝会議、そして地元三朝町の皆様にも御礼申し上げたいと思います。

私共NPO法人健康と温泉フォーラムは、医療・環境・施設・サービス等、温泉保養地に関わるあらゆる分野の専門家を中心に、温泉の健康利用促進の啓蒙・普及活動、滞在型温泉保養地づくりを目的とした研究活動、国際交流などを推進し、本年23年を迎えた特定非営利活動法人です。

私どもの初代会長でありました、故大島良雄先生が1950年（昭和25年）に若干39歳で当時の岡山大学医学部付属病院三朝分院院長として赴任し、退官する1953年の3年間の間に、まとめたのが欧州の研究者の必須文献として有名な「三朝温泉における放射能泉に関する研究」であります。

故大島良雄先生が本フォーラムの会長として活躍されたのが1986年から1991年の5年間でした。温泉の保健的利用の推進と、温泉医学の継承、そして国際交流を通して、特にアジア諸国への温泉医学の普及と研究者の育成でありました。その間、岡山大学の森永先生、谷崎先生などのご協力、ご指導を得て、今日の私達があります。このようなご縁です。この三朝温泉において健康と温泉フォーラムを開催できますことは、大変有意義なことであると思っております。このフォーラムを通じて、全国の温泉病院や温泉医療関係者と温泉地を持つ自治体、旅館・ホテルなど産業界、又一般市民や利用客などに向け日本での本格的な温泉保養地の必要性やそのあり方、温泉医学に対する正しい認識などを広く訴えたいと念じております。本日の実りある討議を祈念して、ご挨拶といたします。

ごあいさつ



吉田 秀光
三朝町長

昭和 16 年 1 月 1 日生まれ
昭和 42 年三朝町教育委員会勤務
昭和 61 年観光商工課長
平成 8 年企画財政課長 を経て三朝町退職
平成 9 年三朝町長（現在 3 期目）

本日、健康と温泉フォーラムが、ここ三朝温泉で、盛大に開催されますことをお祝い申し上げます。また、全国からお出でいただきました皆様に心から歓迎を申し上げます。

三朝町は、町土のおよそ 90 パーセントを森林が占める立地環境から、豊かな水と澄んだ空気を育てております。三朝温泉は、白い狼の導きで発見され、以来八百有余年こんこんと湧き続け、湯治そして現在の温泉観光地を築いて参りました。

1916 年（大正 5 年）に、ラジウム含有量が高温泉の中では世界第 1 位なることが認定され、その直後に、日本では珍しい入浴と吸入の二面からラジウムを体内に取り入れる施設として村営の「三朝ラジウム温泉療養所」を開設。さらに 1936 年（昭和 11 年）には、岡山医科大学の附属研究所が設置され、ラジウム温泉の研究が始まりました。時代の変遷の中で、施設も研究所から現在の岡山大学病院三朝医療センターへと変わりましたが、温泉治療など特異な医療施設として、全国から治療や療養にお出でいただいているほか近年では世界から注目を浴びる施設となっています。また、本年度からは国の事業により、ラドンの適応症試験研究が開始され、ラドンの健康効果のメカニズムが解明されることとなり、三朝温泉のさらなる発展につながるものと大いに期待しているところであります。

さて、昨今の経済情勢が安定を欠く中で、観光を取り巻く情勢も多くの課題を抱えており、この厳しい状況を克服するためには、町をあげて取組まなければなりません。国民生活ではライフスタイルの多様化に伴い、生活習慣病が増加し、内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）に着目した予防対策が重視され、その対策が始まりました。これらの進行予防対策も喫緊の課題であり、湯治からはじまった転地療養など温泉療養を活かした取組み、また友好姉妹都市フランスのラマルー・レ・バン町における温泉保養地の取組み等を参考に、岡山大学病院三朝医療センターと三朝温泉旅館の連携による、ラドン温泉を核とした健康保養基地の造成に期待するところであります。

本日、「温泉を活用した医療と地域の連携」をテーマにしたこのシンポジウムは、まさにわが町あるいは国内の温泉地の将来を展望するもので、講師の皆様方のご助言をいただき、かつ有意義な議論が交わされることと信じております。このフォーラムの開催に多大なご尽力いただきました NPO 法人健康と温泉フォーラム、岡山大学病院、NPO 法人ラドン温泉医療三朝会議そして鳥取県ほか関係者の皆様に感謝を申し上げるとともにご出席いただきました皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げまして、歓迎のごあいさつといたします。

「温泉病院と地域連携 — 三重県四日市市」

川村 陽一

■ はじめに

医療法人主体会小山田記念温泉病院は、三重県四日市市中心部より約10Km離れた郊外にあり、一般病棟・回復期リハビリ病棟・特殊疾患療養病棟・介護療養型医療施設等があり、合計390床である。また、病院の5階には通所リハビリを行っており、7階は老健みえの郷84床がある。病院の周辺は茶畑に囲まれ、東側は伊勢湾が一望でき、西側は鈴鹿山脈を望める抜群の自然環境に囲まれている。

病院の隣には社会福祉法人青山里会の施設群があり、特養290床・小山田老健・軽費老人ホーム・ケアハウス・グループホーム・身体障害者施設等1000人以上の人たちが入所・通所されている。

1977年に小山田病院が開設され、1986年11月新築移転時に温泉が発掘され、温泉施設を作るとともに小山田記念温泉病院と改名し、以後多くの方々に温泉を利用いただいている。温泉病院としては今年で22年目となり、本院では、地域住民・外来患者に対して、温泉プール・通所リハビリ・地域交流ホーム・温泉まつり等で温泉を活用している。

■ 多目的温泉プールでの運動療法

病院1階のリハビリセンターの中に多目的温泉プールがある。深さは3段階（60cm、85cm、115cm）となっており、各自の身長・日常生活活動（ADL）・訓練方法等により水深を選択している。

利用者は、入院患者・外来患者・通所リハビリ利用者・介護予防通所リハビリ利用者・小児水中療法患者と多岐に渡ってい

る。水中運動療法実施者は、変形性膝関節症・変形性股関節症・腰椎圧迫骨折・頸椎症・脳血管障害後遺症・糖尿病など様々な疾患の方々が利用されている。リハビリスタッフは、医療法人では100名を擁して活躍している。

■ 通所介護・通所リハビリでの温泉入浴

1982年に通所介護を開始し、1986年からは全施設、温泉を利用している。2007年に本院通所リハビリ利用者の意識調査を行った結果、本院通所リハビリを選んだ理由として、入浴施設・多目的プール・足浴等の温泉関連施設の良さを挙げられ、満足されている方々が多く認められた。また、ほぼ同数で、リハビリ施設の充実を挙げられた。これらの温泉関連施設は本院のメリットとして今後も有効に利用すべきであり、本院通所リハビリは、次第に当地域利用者が増加し、根をおろしつつある。

■ 地域住民・病院利用者による温泉利用

1986年に小山田地域交流ホームを病院に隣接して開設した。当施設は午前9時半～午後9時まで利用できる温泉入浴施設であり、健康増進クラブという名の会員制となっている。1991年には在宅介護支援センターを、2006年には地域包括支援センターを併設し、毎日数多くの地域住民が集まる交流の場となり、介護保険利用者の相談機能も果たしている。

地域交流ホーム利用者200名に温泉効果のアンケートを行った結果、疼痛改善が最も多く、次いで気分良好、良眠、食欲改善等であった。



■ 足湯の効果

足浴は温熱作用の面から全身浴と同様の効果が得られ、全身浴とは異なり心臓などの循環器系への負担が少なく危険性も低い。その為、心血管系への合併症を持つものが多い高齢者でも比較的安全で気軽に利用できる温泉療法である。

認知症専用特養、病院内アトリウムに足浴施設があり、特に病院内足浴場は 2001 年に設置されて以来、入院患者や外来患者、付き添い家族など様々な方に憩い・交流の場として活用され大変喜ばれている。注目すべき点として、① 屋内にあり外の環境（天候など）に左右されず足浴ができること。② 車椅子でも足浴を利用できること。といった点が特徴である。また、衣服を脱がず気軽に温泉を利用できるといった点や、男女共同でリラックスしながら楽しく会話がはずむ点も人気の一つである。

足浴利用者にアンケートを行った結果、「身体が温まる」「足が軽くなる」「疼痛が和らぐ」「よく眠れる」等の効果を実感されている方が多い。

■ 温泉まつり

毎年 11 月上旬に、「温泉まつり」というイベントを行い、店が多く並び、食べたり飲んだり音楽会やダンス交流など様々な行事が行われる。同時に温泉や介護の啓発として、多目的プールや露天風呂の体験入浴、温泉療法医の講演会、ポスター展示を行っている。何千人という地域住民の参加があり楽しんでいただいている。まさに温泉病院・社会福祉法人の施設群と地域住民が一体になり大きく地域連携の役割を果たしている。

■ おわりに

今後、温泉病院（温泉療法医等）が中心となり、福祉と連携しながら地域住民が幅広く温泉を利用されるよう努力したい。



川村 陽一（かわむら よういち）

医療法人社団主体会理事長
日本温泉療法医会副会長
昭和 31 年名古屋大学医学部卒業、名古屋大学医学部第一外科勤務。
「脳腫瘍の化学療法」で医学博士授与 昭和 61 年 4 月医療法人社団主体会及び社会福祉法人青山里会理事長就任。日本老年社会科学会評議員、日本痴呆ケア学会理事、日本温泉気候物理医学会名誉会員、NPO 法人健康と温泉フォーラム理事。
平成 15 年 10 月 16 日厚生大臣表彰（全国老人保健施設事業功労）
平成 17 年 7 月 8 日環境大臣表彰（温泉功労賞）平成 18 年 11 月 10 日全国社会福祉協議会会長表彰

温泉病院と旅館の連携—宮城県鳴子温泉 鳴子温泉の湯治文化に基づく温泉療養プラン

成川 弘治

■ 病院概要

わが病院のとおきのもの、それは歴史ある鳴子温泉の湯治文化にかかわり合う地域住民と病院職員、特にリハスタッフとの共同作業による温泉療養プランである。

わが大崎市民病院鳴子温泉分院は、鳴子町が平成11年2月1日に国立鳴子病院から移譲を受け、さらに、平成18年3月31日には1市6町の合併を経た公立の病院として、健全な病院運営が住民の方々に対する責任であるという視点から、基本理念として「住民の健康を守り、住民のサービスに徹し、住民にやさしい、信頼される病院づくり」を掲げるとともに、①医療水準の向上②経営基盤の確立と充実強化③医療環境の充実と患者サービスの向上—を基本として病院の運営に努めている。

■ 診療科目

内科、神経内科、外科、整形外科、リウマチ科、リハビリテーション科、眼科、耳鼻咽喉科

■ 病床数 170床（一般病床50床・療養病床120床）

■ 病態別病棟区分

- 1階（40床） 介護療養型医療施設（介護保険適用）
- 2階（40床） 療養病棟
- 3階（40床） 回復期リハビリテーション病棟
- 4階（50床） 一般（急性期）病棟

■ 病院の特色

1. 脳卒中（急性期～慢性期）治療や整形外科疾患のリハビリ
2. 温泉（ナトリウム・カルシウム・炭酸水素塩・硫酸塩泉）を利用した機能回復訓練
3. 在宅医療
4. 脳ドック、脳検診、人間ドックの開設
5. 共同利用施設・MRIの導入

■ 鳴子温泉とは

鳴子温泉郷は、国民保養温泉地にも指定され、源泉数実に300を超え、九州の別府と比肩する温泉量を誇る。まさに日本有数の大温泉郷で、温泉の種類もまた実に豊富。

温泉を医学的に分類すると、世界で13種、日本では11種と言われるが、鳴子には実にそのうちの9種類がある。

鳴子温泉は、文献的には1182年の頃には平泉の藤原氏によっ

て鬼首（おにこうべ）が開湯。また、18世紀前半には、仙台藩の御用湯となり、当時、温泉は一般に「出湯（いでゆ）」と呼ばれ、当目を目的として利用されることが多かった。

昔から「かけ（脚気）川渡、たんせき（胆石）田中、しょうかち（☒渴）赤湯、せんき（疝気）車湯、かさ（瘡）鳴子」と歌われるほど経験的効果があったとされている。

■ 温泉療養プランの成り立ち

湯治客を中心とする宿屋は、足腰の病に苦しむ多くのお客様方に支えられてきた由緒ある湯治場である。

当然のように病気やリハビリテーションまたは入浴法についての問い合わせが多く、また病院内でも脳卒中リハの患者様や整形外科疾患で悩んでいる患者様が、外来で温泉リハを施行し、在宅に戻りたいという希望者が多くなり、当院と町内・開業医の先生方と観光協会とで話し合いが持たれ、次の温泉療養プランが出来上がり、実施に踏み切った。

その後、平成14年6月、地元観光協会定時総会で温泉療養部会設立を宣言し、当初は8軒の旅館でスタート。会議、勉強会、視察を重ね、平成14年12月に町内の全施設に参加呼びかけの説明会。おかげで16軒の施設が仲間に参入。その後、2軒の旅館も新たに参加した。

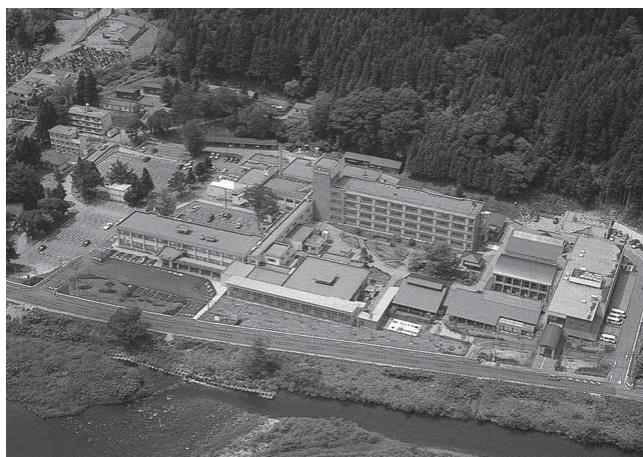
■ 温泉療養プランとは （「鳴子温泉郷観光協会」ホームページより）

入院するまでもない軽度の脳血管疾患（脳梗塞後遺症等）、腰痛、リウマチ性疾患などや生活習慣病でお悩みの方で、温泉療養やリハビリテーションを希望するお客様を対象とした旅館と病院がタイアップしたシステムです。

お客様は、温泉旅館に泊まりながら、大崎市民病院鳴子温泉分院で診察を受け、温泉療法医の指示で温泉療養やリハビリテーション治療の指導を受けられます。

さらに、生活習慣病予防のための食事指導や運動のアドバイスも受けられます。旅館は、病院の予約と送迎のお手伝いをいたします。

温泉療養プランは、旅館が中心となって企画・実施しているものです。大崎市民病院鳴子温泉分院へ直接申し込むことはできません。詳しいことは、温泉療養プラン実施旅館とよくご相談ください。



成川 弘治（なりかわ ひろはる）

昭和 22 年 1 月 26 日生
宮城県仙台市出身
岩手医科大学医学部卒業

【資格】

東北大学医学博士取得
日本神経学会神経内科専門医
日本リハビリテーション医学会専門医
日本超音波医学会認定超音波専門医
日本内科学会認定内科医
日本温泉気候物理医学会温泉療法医

【略歴】

東北大学医学部附属病院 脳神経内科研修医
東北大学医学部附属病院 神経内科医員
国立療養所宮城病院 第二内科医長
国立療養所宮城病院 神経内科医長
東北地方医務局業務指導室長併任
東北大学医学部講師併任
国立療養所宮城病院 臨床研修部長
国立療養所宮城病院 リハビリテーション科医長
国立鳴子病院 副院長
町立鳴子温泉病院 院長
大崎市民病院鳴子温泉分院 院長

「長期滞在型リトリートの杜事業コンソーシアム」 ～産・官・学の好ましい「三角関係」

小山 芳久

■ 山梨県北杜（ほくと）市は…

山梨県北西部に位置する北杜市は、北は八ヶ岳連峰、南西は甲斐駒ヶ岳から連なる南アルプス、東は茅ヶ岳、北東はみずがき山・金峰山などの日本を代表する美しい山岳景観に囲まれています。2004年から06年にかけて、明野村、須玉町、高根町、長坂町、大泉村、白州町、武川村、小淵沢町の8つの町村が合併し誕生しました。市内には、中央自動車道、JR中央本線、JR小海線が走っています。日本産ミネラルウォーターの約30%が我が市で生産され、日照時間日本一の明るい土地です。

■ 北杜市長期滞在型リトリートの 「長期滞在型リトリートの杜」とは…

「山岳」「名水」「国蝶オオムラサキ」、「清里高原」「増富ラジウム温泉」など、豊富な観光資源に恵まれています。しかし、東京・新宿からJR中央本線特急で約2時間の距離にあるため、観光入れ込み客数（676万人）のうち、約10%しか宿泊に結びつかない現実があります。

そこで北杜市は、リフレッシュを求める若年層や悠々自適の「団塊の世代」、地域とのふれあいを求める人々などをターゲットに、仕事や日常生活を離れ、自分だけの時間や地域の人との交流によってリフレッシュできる『癒しの空間（リトリート）』を提供して、長期滞在型のまちづくりを進めています。

■ 「北杜市長期滞在型リトリートの 杜事業コンソーシアム」の設立

2007年12月、「北杜市長期滞在型リトリートの杜事業コンソーシアム」を設立しました。コンソーシアムとは事業共同体という意味です。

メンバーは、長期滞在にかかわる人たちで、市内の観光業者、飲食業、ギャラリー、食品・醸造業、建設・建築業や、NPO法人、合計約60団体から成り立っています。

リトリートに特化した長期滞在型のまちづくりを進めていくため、旅行者の受け皿づくりを行うため、「商品開発部会」「プロモーション部会」「地域交流ブランド部会」を設け、プログラム整備、人材育成に取り組み始めています。

現在は、心と体の健康を考えた農業・食・自然体験などの地域交流プログラムや、温泉・森林療法などの健康プログラムの

開発、長期滞在を可能とする宿泊システムの構築、旅行者への事前提案や、滞在時のコーディネーター役の「地域コンシェルジュ」の育成を始めています。

■ 私の地域ではどんな取り組みをしているか。

「北杜市長期滞在型リトリートの杜事業コンソーシアム」に所属するメンバーは、それぞれの企業・団体、そして地域でも、リトリートに結びつく活動を進めています。

私が支配人を務める日帰り入浴施設「増富の湯」がある、北杜市須玉町増富地域は、標高800m～1300mの山間地に、10の集落が点在。人口約700人に占める65歳以上人口は63%を占め、かつ人口そのものが減り続けています。また、かつては山間地の山肌は、農地として活用されてきましたが、現在は遊休農地が60%を越えています。

そこで、2008年3月、増富地域再生協議会を私を含む地元有志で立ち上げ、地域にある問題点を洗い出す作業を行い、「増富地域再生計画」を立案し、この夏から具体的な活動を開始しました。

■ 「増富の湯」では…

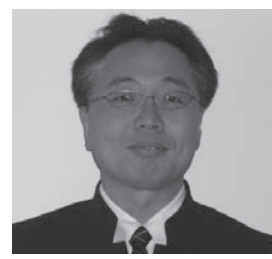
増富地域の核である「増富ラジウム温泉」は、戦国時代、武田信玄公の時代から愛されてきた湯治場です。現在、地域には観光ホテル、旅館、民宿を合わせて8軒が営業しています。「増富の湯」の経営母体である「財団法人みずがき山ふるさと振興財団」は、市が全額出資している財団で、日帰り入浴施設、宿泊施設、キャンプ場の運営、ならびに近隣農家から農地をお預かりして農業と農産物生産・加工にも取り組んでいます。

現在、財団では「体質改善ができる、森林と遊休農地と源泉を活用した長期滞在型の保養地」プログラムを作ることに取り組んでいます。

この取組みを行う上で、（財）都市農山漁村交流活性化機構の「山村再生総合対策事業」助成金を活用し、今年を初年度として5カ年計画でプログラム開発に入りました。

この秋は、地元山梨大学と「体質改善（冷え解消）プログラム」開発のための共同研究に取り組んでおります。モニターには森林での過ごし方を体験し養生食を摂り源泉養生を体験し、開始前と後に心理的变化を問診し、活性酸素の量や血流改善度等のチェックをします。

まずは、心と体のバランスを整えることが冷え解消の第一歩ととらえ、そのデータを基に体質改善プログラムの骨格を作り、最終的には1～3週間の滞在プログラムを作りあげ増富ラジウム温泉峡を滞在型の温泉保養地に作り上げたい。



小山 芳久 (こやま よしひさ)

山梨県「北杜市長期滞在型リトリートの杜事業コンソーシアム」代表
 1954年生まれ。99年、(財)みずがき山ふるさと振興財団増富の湯支配人兼任。2002年、同財団の総支配人に就任。現在、北杜市観光協会監事、増富観光協会理事、増富地域再生協議会副会長、NPO法人健康と温泉フォーラム理事。温泉利用指導者、高齢者体力づくり支援士、生命科学研修所整体療術師。

三朝温泉活性化の取り組み研究

大野 正人

■ 三朝温泉の現状と課題

(1) 観光による温泉旅行の減少

我が国の観光による温泉旅行の需要は少子高齢化や旅行日平準化等の社会的要因により減衰しており、旅館の供給過剰が今後も継続する見込みである。三朝温泉ではさらに地元需要の衰退により大都市、特に京阪神への依存度が増大している。

(2) 温泉地の宿泊目的、利用形態転換の必要性

このような環境変化に適応するため、温泉観光地は滞在型への転換を図っていくことが必要とされている。その滞在目的としては既存の観光利用の延長線上にある滞在観光拠点を目指す方向と、我が国に古くから存在する湯治の現代版である保養・療養滞在を目指す方向の2つがある。三朝温泉はラジウム泉という特有の温泉資源、温泉医療という他の温泉地にない資源を有していることから、この保養・療養型の滞在を目指すことが必要とされている。

(3) 必要な施策

そのために必要な施策は3つある。一つは温泉と医療による療養・保養プログラムの開発であり、二つ目は快適な滞在活動のベースとなる「魅力ある街並み」の再生である。そして三つ目が滞在型に即した業態への旅館や店舗、観光施設の転換である。

■ 魅力ある街並み再生への方向性

(1) 温泉街の現状と課題

三朝温泉は三徳川という開放的な景観の河川を挟んだ線状の空間構造を有しているが、宿泊客の回遊性の欠如が課題となっている。回遊性は拠点施設や広場を結節点として、その間を繋ぐ散策コース、そのコースに沿って並ぶ滞在客向けの各種サービス店舗、そしてこれらの点と線をより快適にするための景観や園地により形成される。そしてこの回遊ゾーンがほぼ半径500mの範囲に納まっていることが望ましい。

三朝温泉は景観という点では三徳川の河川景観と温泉街の関係が希薄であること、また拠点となる施設や広場が乏しく、回遊のリズムが作りにくいことが上げられる。また店舗構成ではナイトライフや周遊客を対象とした店舗が多く、滞在客のニーズへの転換が遅れていることである。

(2) 街づくり、魅力再生の方向性

そこで、街並み再生のためには街並みの空間構造を見直すことが必要である。三朝温泉の最大の空間資源である河川を眺めたり、体感する場を温泉街を散策する過程でリズム良く作り出していくこと、そして要所要所に休憩したり佇んだりする場を

形成することが必要である。その出発点となるのが「三朝橋の両端」のゾーンである。このゾーンにはビジターセンター機能や広場があることが望ましい。そしてここを起点として昔ながらの情緒が残っている「温泉本通り」、そして新しい拠点施設と成り得るプランナールみささ周辺への回遊ルートへと続き、さらに「かじか橋」まで伸びて、河川を挟んだ8の字型の回遊ルートを形成したい。

一方、温泉街全体を見渡せる展望ポイントも重要である。これは南苑寺周辺への樹林を抜けていく森林散策路がポイントとなる。このような店舗集積ゾーン、橋の上から風を感じる開放的なポイント、樹林に囲まれた遊歩道と展望ポイント、これらの要素をつなぎ合わせて回遊ルートは形成される。特に重点的なゾーンとなる「温泉本通り」については、空き店舗を活用した休憩カフェや、空き地を活用した河川を望む足湯広場などが整備されると、滞在中の時間を過ごす場が出来ていく。

保養・療養滞在のプログラムは何も医療センターでの施術やリハビリ体操だけで成立するものではない。快適な環境で散策したり、外気を感じることで人々は心身のリラクセスを得ることが出来るものであり、この意味では「快適な街並み環境」は保養・療養プログラムに不可欠な要素であるといえよう。この快適な環境があるからこそ、人々は都市で療養するのではなく温泉地で療養をするという動機付けになるのである。

また、三朝温泉の資源は街並みだけではない。周辺には田圃や棚田の景観、そこを流れる用水路や里山の樹林なども残されている。このような周辺の自然環境も取り込んで滞在環境を整備していくことが必要とされている。



大野 正人（おおの まさと）

財団法人日本交通公社 研究調査部研究主幹

【略歴】 1953年、東京生まれ。1976年、東京大学農学部林学科・森林風致研究室を卒業。1976年、JTBグループ会社にてリゾート開発、ホテル旅館のコンサルティング事業に従事したのち、1991年より財団法人日本交通公社にて宿泊産業観光施設温泉地の調査研究に従事。

【著書】 観光学基礎（JTB能力開発 / 共著 1994）、地域振興と観光ビジネス（JTB能力開発 / 共著 2008）他

【公職】 2008年より立教大学観光学部非常勤講師

「温泉を活用した医療と地域の連携」

コーディネーター 合田 純人

「温泉を活用した医療と地域の連携」のあり方を発信、
これからの日本の滞在型温泉保養地のあり方を提言したい。

■ はじめに

当時、岡山大学副学長の清水先生が上京され、私どもの事務局にこられたのが昨年の暮れでした。「岡山大学病院三朝医療センターが国立大学で唯一の温泉医療施設であり、この度その改築に当たり、高齢化する社会の中で高度・多様化する医療の需要に対応する新しい役割を検討し、これからの温泉を活用する医療と地域の連携を通して入院患者のみならず、地域住民の健康づくりや、介護・福祉サービス、また域外の保養客の健康推進など多面的な利用促進が望まれ、その運営形態も、一部NPO/民間企業などが関わるなど、よりオープンで地域密着型の温泉医療を目指さなければならないと。」熱く語られました。当フォーラムの初代会長大島良雄先生が3年赴任された因縁を持つ岡山大学病院三朝医療センターは国立大学で唯一残った温泉医学の継承する病院であること以上に当フォーラムにとっては意味ある存在であり、全面的な協力をお約束いたしました。幸い今回、三重県四日市市の小山田温泉記念病院、宮城県大崎市民病院鳴子分院、山中温泉医療センター、湯原温泉病院など全国の温泉病院の代表者や弘前学院大学、新見公立短期大学、岡山大学などの大学関係者、青森県、長野県、山梨県北杜市などの自治体関係者、熊本菊池市商工会、同菊池温泉組合、山梨県増富温泉旅館組合の代表者など全国から参加いただきました。本日までご集の皆様と一緒に、温泉地における医療機関と地元自治体や、旅館ホテルなどの事業者との連携によって、滞在サービスの向上や、景観整備などハード・ソフト両面にわたる観光型から滞在型保養地へ課題を討議し、その成果を全国の温泉と医療関係者に発信したいと念じております。

■ パネルディスカッションの課題

いかに有機的に自治体、旅館・ホテル産業、
医療機関、市民がネットワークを組めるか？

戦後から今日まで、国民の価値観の変遷により温泉の利用形態も様々に変化してまいりました。バブル崩壊後加速した温泉地の疲弊は全国的な規模に波及し、温泉地再生が大きな課題となりました。NPO 法人健康と温泉フォーラムは平成15年、日本政策投資銀行と共同して全国100名の有識者からのインタビュー、レポートを纏め「日本の温泉地再生への提言」として



マスコミや関係団体に送付し大きな反響を呼びました。5年後の現在、温泉地は勝ち組と負け組みがはっきりわかれ、あきらかに温泉利用の形態が観光・歓楽型から保養・健康づくりに移行したことが実感できます。そのなかで、特に注目されるのは「元気な高齢者の健康づくり、保養の場」としての温泉の活用と本格的な保養温泉地づくりの取り組みです。日本は「湯治」という伝統が古くからあり、スローライフが叫ばれる今日、温泉の本来持つその機能を再評価し、これからのライフステージに積極的に取り組んで行こうという試みが全国の温泉地で始まっています。

そうした、温泉と温泉地を取り巻く環境の変化のなかで、特に、社会に対し発信したいと考える内容が、わが国が直面する社会的課題の一つ、高齢者の医療費葛藤であり、医療政策の転換にともなう温泉の健康維持・促進活用への積極的な取り組みです。本フォーラムはラジウム温泉という特異な温泉と岡山大学病院三朝医療センターという日本で唯一の国立温泉病院という資源を持つ三朝温泉がそのような地方性、固有性を活かしながらも、どのように地域の健康づくりと地域の活性化を実現するかの討議の場であります。観光温泉地から滞在型保養温泉地としてどのような試みが可能なのか、温泉に関する多方面の専門家、実務家からの意見を集約し「新たな温泉時代を予感する声」を発信し、国民の意識を喚起していくことができると念じております。本日の討議の成果をスタートに、新たに組織された、NPO 法人ラドン温泉医療三朝会議が地元での推進役となり、近い将来全国の温泉病院や医療機関と温泉地の連携の一つのモデルとなりますよう、願っております。



合田 純人（ごうだ すみと）

NPO 法人健康と温泉フォーラム常任理事
1986年の設立より'95年まで、健康と温泉 FORUM 実行委員会事務局長を務め、世界保健機構（WHO）と公式関係をもつ国際温泉気候連合（FITEC）の、アジア・太平洋協議会（FAPAC）事務局長も1988年以来兼任し、当該地域の温泉の健康利用と温泉保養地の啓蒙普及に務めている。又、ペルーやイラン政府の温泉開発プロジェクトの調査・研究に携わると同時に、イタリアやイスラエル等の温泉保養地を広く雑誌や新聞でPRし、温泉のグローバル化を積極的に進めている。国内ではJTB旅館・ホテル連盟や自治体の観光・まちづくりアドバイザーとして活躍中。

温泉を活用した医療と地域の連携 「温泉大国・日本を世界の温泉治療のメッカに」

小嶋 光信

日本は世界の三分の一、約千カ所の温泉地を有する温泉大国でありながら、この世界的資産を活かしきれずに、多くの温泉地は寂れ、経営の危機にある温泉旅館やホテルが多い。

これは、特に高度成長時代に企業の社員旅行や一般客を中心とした大型団体向けの温泉旅館やホテルが、経済の成熟化に伴うライフスタイルの変化や、大型団体を好まぬような個重視の風潮の中で、いわば大鑑巨砲主義的経営として消費者に見放されてきた結果による。

更に、円高による海外旅行の低廉化から海外シフトが顕著になり、その活路として極めて低料金での募集による観光客に期待をかけ、立ち寄り湯や日帰り入浴、1泊プランなどを中心に集客に努めたが、結局、経営的に思わしい結果が出せなかった。また大量の客に対処するため、大型浴場で塩素による消毒等を行なってしまい温泉の効能に疑問符もついてしまった。

また、温泉医療の研究や診療も全国の国立大学で診療所が次々開設され、一時は流行したが、これという思わしい研究成果もなく、結局、最近東京大学も閉鎖したため、ラドンを中心とした温泉医療の研究・治療も岡山大学病院三朝医療センターただ一つになってしまった。岡山大学でも、この三朝医療センターを閉鎖するか否か、清水信義先生を委員長に検討し、日本全国で唯一の研究・診療の拠点となったこと、また実際に西洋医療を補完できる、あるいは西洋医学で治療することが困難な病気で効能が見られることなどから世界へ向けて「ラドン温泉治療」を研究・実施する機関として、存続・強化していく方針となった。

そのために今後は、

1. ラドン温泉治療・温熱治療の研究を進め、科学的な根拠をしっかりと研究する。
2. オーストリアのバドガシュタインとの連携。インスブルグ大学など世界各地の大学との研究、連携協力を計る。
3. 三朝医療センターは、全国でも稀なラドン温泉熱気浴施設と泥治療などの実績があり、アジアで唯一の「ラドン温泉治療」の医療機関として相応しいように、設備・研究を整備・拡充できるよう検討する。
4. ラドン等の温泉治療を健康保険適用の対象とできる可能性を開拓する。西洋諸国では、ラドン温泉治療は古くから貴族の治療とされ、その薬効が認められており、健康保険適用もされて

いるが、我が国では古くから湯治の習慣があるにもかかわらず、未だ適用に至っていない。高齢化社会では、もっとも必要な治療、あるいはリハビリ方法としての認知を目指す。

5. これらの温泉治療と、温泉旅館とのコラボを計り、地域活性化を進める。

上記の点等の検討・推進が急務ではないだろうか。



小嶋 光信 (こじま みつのぶ)

両備ホールディングス(株) 社長
岡山大学 エグゼクティブ・アドバイザー
1945年生、東京都出身。慶應義塾大学経済学部卒業。68年三井銀行(現・三井住友銀行)入行。73年両備運輸(現・両備ホールディングス株式会社)常務に就任、74年慶應義塾大学ビジネススクール(現・慶應義塾大学大学院経営管理研究科)終了。91年両備運輸、99年両備バス(現・両備ホールディングス株式会社)、両備システムズ、岡山交通、両備住宅等の社長に就任。2007年両備ホールディングス株式会社社長に就任。現在、両備グループ56社のうち42社の社長。
文部大臣表彰の他に中国運輸局長表彰、国土交通大臣表彰、海上保安庁長官表彰を受賞。公職は岡山経済同友会顧問、岡山県バス協会会長、日本民営鉄道協会理事、岡山県旅客船協会会長など。

「三朝町における医療と地域の連携」

吉田 秀光

■ 三朝温泉の紹介

三朝温泉は、1164年（平安時代）の頃に源頼朝の家臣である大久保左馬之祐という武士が三徳山に参拝の途中に、年老いた白い狼に出会い見逃してやったところ、その夜に、夢枕に立った妙見大菩薩が「その方の、慈悲深い心に感じ入った。そのお礼に、いで湯のありかを教えよう」と、楠の古木からこんこんと湧き出る温泉を教えたといひます。

また、三朝の由来は、いろいろと言われておりますが、「この地のお湯に浸かり三つ目の朝を迎える頃には病が消える」という一説もあり、当時から三朝温泉は「湯治」の場として特異なものであったと思われまふ。

■ ラドン温泉の効用

1916年（大正5年）に、世界一のラジウム温泉と発表されてすぐ、村営の「三朝ラジウム温泉療養所」が開設されました。入浴と吸入の二面からラジウムを体内に取り入れる施設として、わが国では珍しいものであり、後に三朝医療センターの熱気浴施設へと活用されています。

三朝温泉では、ラドン温泉のホルミシス効果、いわゆる呼吸により体内に入った微量の放射線が細胞などに刺激を与え、その動きを高め体内の新陳代謝を促進し、これによって、体の免疫力や自然治癒力が高まるということで、三朝温泉では「元氣一発つるつるお肌」としてマンガ本を作ってPRするなどし注目を集めてまいりました。詳しくは専門の先生方をお願いすることといたします。

また、二年前から旅館組合で発売している、三朝温泉100パーセントの化粧水、「三朝みすと」は、ラドン温泉を特殊な技術により、肌への浸透力、保湿力を高めた化粧水で、完全無添加のそのまんまの三朝温泉です。口コミで広がりお陰さまで、これまでに6万本の販売を達成しています。特に女性の皆さんには大人気の商品であります。

■ ラドン温泉の影響効果の研究から始まる医療と三朝温泉の新たな連携

今年度、国の事業により岡山大学、原子力機構人形峠環境技術センターが連携されて、極微量ウラン影響効果試験を実施することになりました。ラドンの健康効果のメカニズムが科学的に解明されること心待ちにしております。このことによって、

医療機関と三朝温泉が今以上に結びつきを強め、新しい魅力が生まれぬか、三朝温泉観光の新しいカードとして活性化策を考えて見たいと思ひます。

例えば、一週間程度の滞在で、医療機関では健康診断や指導を受け、温泉街では足湯や熱気浴を体験する。一方で三徳山や小鹿溪などの豊かな自然に浸り、農業や陶芸など趣味にあった体験をすることで、心のリフレッシュにも効果がある。当然、旅館に宿泊していただくとなれば、旅館のもてなしも工夫が必要となり、大型旅館から湯治の宿まで大小の規模で構成される三朝温泉の特徴を活かせるのではないかと考える次第です。

三朝温泉も生ゴミの肥料化、天ぷら油のバイオディーゼル燃料など環境にやさしい循環型社会づくりに取り組んでおり、健康と環境をテーマに推進していきたくて思ひます。

■ 地域連携と基盤整備

本町には、三朝医療センターと三朝温泉病院の二つの病院があります。各々の特色が活かされて、温泉を活用した医療が提供され、全国から多くの方々在三朝温泉に來られます。

この二つの病院は、いま新しい施設の計画を具体化されようとしてると聞きます。例えば、二つの病院と密接に連携して町の健康づくりの基盤整備を行なうことが可能であれば、温泉を核とした健康保養基地として、三朝温泉の活性化と「あったかい町づくり」の推進に大きく寄与することが期待されます。



吉田 秀光（よしだ ひでみつ）

三朝町長昭和16年1月1日生
 昭和42年 三朝町 教育委員会勤務
 昭和51年 三朝町 総務課 交通防災係長
 昭和52年 三朝町 企画課 交通防災係長
 昭和58年 国体事務局長補佐
 昭和61年 観光商工課長
 昭和62年 建設課長
 平成8年 企画財政課長
 平成8年 三朝町退職
 平成9年 三朝町長 現在3期目

「温泉を活用した医療と地域の連携 —医療機関の立場で 三朝温泉における期待と課題」

光延 文裕

■ はじめに

1982年、岡山大学医学部附属病院三朝分院（現三朝医療センター）において呼吸器疾患に対する温泉療法が開始されました。その当時は、ステロイド依存性重症難治性喘息のみが温泉療法の適応となる疾患であるとの考え方が強かったため、入院症例の多くは重症型の気管支喘息（以下、喘息）症例でした。その後、通常の喘息や慢性閉塞性肺疾患（以下、COPD）症例などにも適応を拡大し、入院呼吸器疾患症例は25年間で2700例以上となりました。過去25年間に当院へ入院した喘息およびCOPD症例の年齢別検討を行ってみると、温泉療法を必要とする呼吸器疾患患者の年齢は年々高くなっていく傾向が認められます。これは、近年高齢化社会を迎えつつあることが最も大きな要因であると考えられますが、その他にも、喘息症例に比べ、COPD症例の増加傾向が著明であること、そしてCOPD症例は比較的高齢者が多いこと、などもその理由と考えられます。また、鳥取県内と県外（遠隔地）に分けてその比率を観察してみると、約半数が県外からの症例でした。鳥取県外の遠隔地として岡山、大阪、広島、兵庫、東京、愛媛、山口、京都、神奈川などからの入院患者が多い傾向であり、その範囲は37都道府県に及んでいました。

■ 温泉療法とその作用機序

できるだけ長期にわたる喘息やCOPDに対する温泉療法により、症状の改善のみならず、副腎皮質機能の改善、抗酸化機能の活性化、精神的リラックス、自律神経系の安定化など全身機能の強化・維持を図ることが可能であると考えられています。さらに、喘息の治療に必要な薬剤費の低減効果の可能性も示唆されています。

温泉療法の適応疾患を表に示します。呼吸器疾患の他にも、骨、筋肉、関節に関連した運動器疾患、脳梗塞後遺症のような中枢神経系の疾患、糖尿病や肥満症などの代謝性疾患なども温泉療法の適応となります。それら疾患の治療においては、その生活の質（QOL）を高めるために、十分な運動と精神活動の活性化が重要な要素となります。

■ 今後の課題

さらに、温泉療法の医学領域への応用は、健康増進、福祉（介

護）、疾患の予防、そして疾患の治療と、図に示すがごとくその範囲は多岐にわたることも考慮しながらさらなる充実を計っていかねばなりません。温泉療法の適応疾患はかなり広範囲にわたりますが、温泉療法の適応疾患には、絶対的適応と比較的適応の2つがあります。温泉医学の絶対的適応となる疾患（温泉を利用しなければ治療が困難な疾患）は、主として喘息やCOPDなどです。これらの疾患では、薬物療法、食事療法、あるいは運動療法のための治療では奏効し難く、温泉療法なしでの十分な治療は極めて困難です。温泉療法の比較的適応（一応薬物療法や、食事、運動療法の効果がある程度期待できるものの、温泉療法を併用した方がより治療効果があがるような疾患）は、たとえば、変形性関節症（腰椎、膝関節、股関節、肩関節、頸椎など）、関節リウマチ、脳梗塞後遺症、糖尿病などがあります。これらの疾患に対して、さまざまな温泉療法（温泉プールでの水中運動、鉱泥湿布療法、吸入療法、飲泉療法、温泉浴、泥浴、熱気浴など）が行われます。

当センターでは、温泉療法を主として入院治療として行なっていますが、温泉旅館に長期滞在上、施設の整った病院へ通院しながら温泉療法を受ける方法もあります。しかし、日本には、ヨーロッパ諸国の温泉地のように、温泉療法医による温泉療法の処方箋に基づいて各施設で温泉療法が受けられるような、しっかりとしたシステムが確立されていません。専門医の処方箋により、適切な温泉療法が受けられるようなシステムの構築が望まれるところです。さらに、健康増進、疾病予防、福祉（介護）にも温泉資源が活用できるような社会制度を確立することは、これからの高齢化社会にとって重要な課題であると考えられます。

図 これからの温泉医学の位置づけ

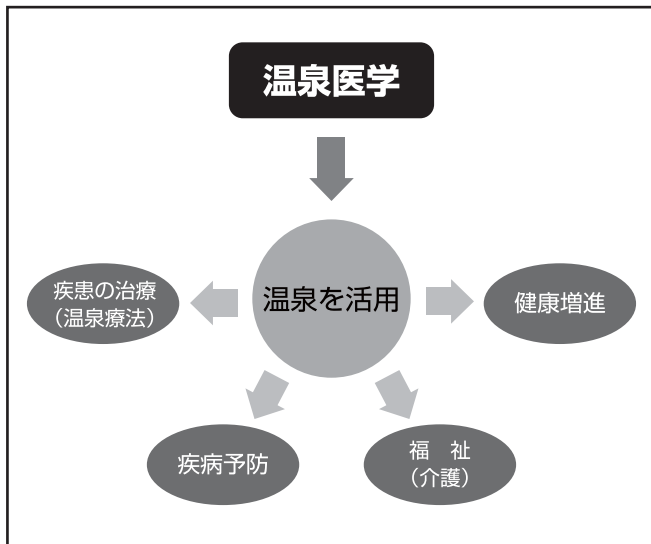


表. 温泉療法の適応疾患

呼吸器疾患	気管支喘息 COPD（慢性閉塞性肺疾患）
運動器疾患	関節リウマチ 腰痛症 変形性関節症 頸肩腕症候群 頸椎症 肩関節周囲炎 外傷の後遺症
神経疾患	脳血管障害後遺症 帯状疱疹後神経痛
循環器疾患	閉塞性動脈硬化症
皮膚疾患	アトピー性皮膚炎 皮膚潰瘍
代謝疾患	糖尿病 肥満症



光延 文裕（みつのぶ ふみひろ）

1984年3月岡山大学医学部卒業
 1988年3月岡山大学大学院医学研究科修了
 1988年10月南カリフォルニア大学研究員
 2001年3月岡山大学医学部附属病院三朝分院助教授 岡山大学医学部附属病院三朝医療センター副センター長併任
 2008年6月岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（老年医学）
 岡山大学医学部・歯学部附属病院三朝医療センター長を併任
 現在に至る

医療と温泉

御船 秀

三朝温泉は古くから湯治場として栄えてきました。大正の頃パリ万博でラジウムの含有量が世界でも有数であると発表され一躍有名と成ました。お陰で温泉の良さにおんぶにだっこで今日まで至っていますが、この時期にその温泉の効能の良さを見直し本来の三朝温泉のラジウム温泉が現代の健康志向のニーズにも対応しうる素晴らしい温泉であることを再確認し、さらに医療との連携でさらに磨きをかけることが大切と考えています。幸いにも岡山大学附属病院の三朝医療センターは世界に2ヶ所しかないと言われている素晴らしいラドン温泉治療のできる施設です。そして三朝温泉はいろいろな形態の宿泊施設があります。これはあらゆるお客様に対応できるということです。温泉街あり山あり川あり自然豊かで、ラドンも自然放出してるとか。健康森林ラドン浴も可能ですし、酸素濃度も銀座の13倍とも聞いています。また三徳山・国宝投入堂もあり文化も楽しめるこの三朝で温泉保養リゾートが可能ではと考えます。三朝温泉のラドンの効能を多くの方により効果的に享受していただけるには医療との連携が何より大切です。また、経費的に負担を少なくするために何らかの助成制度がないものかとおもいます。三朝医療センターでの処方箋があれば宿泊費に補助金がでるような経済医療特区的なことはできないのでしょうか。旧ソ連・ドイツ・イタリアあたりでは保険適用がもうすでに実施されますね。新しい時代の新しい温泉地それが医療と温泉の連携した三朝温泉の温泉保養リゾートと考えています。



三船 秀 (みふね しゅう)

三朝温泉旅館協同組合理事

「健康と温泉フォーラム 三朝」への期待

■「高齢社会に突入した今日、人々の健康の維持、増進のために温泉に期待される役割は一層増大すると思います。温泉の医学的な効能も重要ですが、温泉地での滞在中に当地の文化や住民と接して、人々の心が充実することも無視できません。温泉地には、人々の心身を健康にする魅力があり、温泉地に立地する医療機関は、医学的な見地から温泉を利用するだけでなく、周辺の宿泊施設、飲食施設、物販施設、観光施設等を活用することで、医療機器や薬剤のみでは対応できない人々のトータルの健康維持、増進を実現できます。この際には、温泉地の住民との連携が不可欠です。住民が温泉を大切にし、周辺の施設で滞在者を自然に受け入れ、交流できれば、温泉地に滞在する人々の充足感が高まります。温泉病院のある温泉地、三朝温泉で開催される今回のフォーラムで、温泉を媒介とした滞在者と住民の交流のあり方について有益な示唆が得られることを期待します。」

関口 陽一

株式会社日本政策投資銀行
四国支店業務部参事役

■ 岡山大学病院三朝医療センター、NPO法人健康と温泉フォーラムおよびラドン温泉医療三朝会議、三朝町の主催による「温泉を活用した医療と地域の連携」が鳥取県、鳥取県中部医師会等の支援で開催されることはまことに時宜を得たイベントであります。

このたび山中温泉医療センターが目指す「温泉療養プラン」が「温泉を利用した医療と地域連携」への起爆剤となるためのノウハウを求めて遙か三朝まで出かけてきました。

私たちは、山中温泉の観光協会、商工会や旅館組合とのコラボレーションで地域の住民と滞在型観光客への癒しと観光、健康増進を目指した各種メニューを提供しています。病院内の温泉プール利用によるリハビリ、お出かけミニドックと代替医療の提供でストレス解消、健康回復の援助を目指しています。未だ道半ばですが、このフォーラムへの参加で「選ばれる温泉地と特色ある温泉療養の提供施設として何をすべきか」を学びたいと思います。

高橋 一郎

山中温泉医療センター長

■「会員制の滞在型温泉施設を下呂温泉、湯の山温泉、内海温泉で経営しているが、大変人気があり、健康づくりや保養のためのサービスのあり方や、温泉病院との連携に関し専門家の意見など聞けたらいいと思った。」

栃本 正明

ホテルマロニエグループ
会長

■「温泉地として今後医療や介護など域内の温泉活用と旅館や観光のありかたを学び、菊池温泉での新たな湯治スタイルを検討したい。具体的には、菊池市の医療機関や、公共施設、また温泉旅館などとともに、域内の自然を活かし、例えば1日目 医師会等で人間ドッグをしてもらい 2日目はそれぞれ ゴルフ・散歩・湯中運動など運動プログラムなどを組み合わせ一泊二日ではない滞在型の温泉地を形成したいと思う。そのため このような実例を紹介していただきたいと思います。また、このような取り組みをする上での注意点及び関係機関・行政のかかわり等をお教えください。」

笠 愛一郎

熊本県菊池市商工会議所

会長

川津 清一

熊本県菊池温泉旅館協同組合

理事長

■「ベルリンはすっかり秋で歩道は落ち葉でうまっています。だいぶ寒くなっています。

旧ユーゴスラビア諸都市とナポリなどをまわった感想としては、国際的観光地はおいしいものがあるということと、気候、雰囲気などからっとしています。日本の温泉街のようにじめじめした感じというのは世界でもまれではないでしょうか。このあたりをうまく生かせればと考えます。

また三朝温泉にはおいしいものがない。これが課題だと思います。明日パリへ移動して週末にはスペインへ入ります。ベルリンにて」

大國道夫

大國道夫都市建築総合研究所

代表

■「増富ラジウム温泉峡は、信玄の隠し湯の1つとして傷病兵を療養させたことにはじまる長い歴史を誇る温泉。しかし、湯治場としての性格が強い温泉でありながら、温泉療法における医学的な裏付けや医療機関との連携は、今まで希望はあったが実現されなかった。このような中、「増富の湯」では、林野庁の山村再生総合対策事業の採択を受け、「森林と遊休農地と温泉を活用した滞在型健康プログラムの開発」に取り組んでいる。山梨大学や医療機関、その他専門機関と連携して実証実験を行い、医学的見地からも信頼性の高い長期療養プログラムを開発していこうというもの。今後、温泉・運動・食・森林を組み合わせたプログラムにより、人間の自己免疫力を高めるとともに、医療機関とより密な連携システムを構築してデータ収集を行い、プログラムの精度をブラッシュアップして、名実ともに保養温泉地、健康の里となることを期待している。」

丸茂和彦

山梨県北杜市観光課 観光企画担当

総 括



清水 信義
NPO 法人ラドン温泉
医療三朝会議理事長

超高齢社会の到来により、まもなく我が国の人口の30%近くが65歳以上の高齢者となります。幸い平均寿命の伸びとともに、健康で活動的な高齢者も増加してきていますが、しかし、加齢とともに各種の慢性的な疾病も徐々に増してくるのも事実です。

折しも後期高齢者医療制度の是非が大きな政治的議論となり国を揺さぶっています。基本的には後期高齢者の医療費が、現在でも全医療費の40%を占めていることで、今後急速に増加する高齢者が、国民の医療費負担を増すことからの議論です。

これからの時代は、国民がいかにか健康に歳をとって行くかが、個人にとっても社会全体にとっても最も重要な事柄です。健康に歳をとって行くには、いろいろな方法や過程が有ると思います。軽度の慢性的な疾患であれば、できるだけお薬の世話にならずそれに替わる健康促進の方法を取り入れることも必要です。

古くヨーロッパでは、健康増進やある種の疾患の治療として広く温泉が用いられてきました。我が国でも近年までは温泉が湯治として用いられてきましたが、西洋医学の顕著な効果に比べ、急速な変化の少ない温泉療法は次第に廃れてきました。そして、現在国立大学では、岡山大学病院三朝医療センターが唯一の温泉医療施設です。

いま、高齢者社会に直面した現状の中で、究極のエコ資源である温泉を、1) 本当に適応がある医療に、2) 日常生活の中での健康増進の環境として、3) できれば加齢を抑える効果も期待して、活用することを考える今回のフォーラムが大きな成果をあげることを期待しています。

お忙しい中、基調講演を賜りました平井伸治鳥取県知事、全国の事例をご報告いただいた川村陽一医療法人社団主体会理事長、成川弘治鳴子温泉分院長、小山芳久北杜市コンソーシアム代表、大野正人(財)JT B 研究調査部主幹、並びに地元関係者、健康と温泉フォーラムの合田常任理事はじめ関係書の皆様に、厚く御礼申し上げます。



THE FORUM ON THERMALISM IN JAPAN

健康と温泉フォーラム 三朝

温泉を活用した 医療と地域の連携

発行 岡山大学病院三朝医療センター
鳥取県東伯郡三朝町山田 827
電話 0858-43-1211 FAX 0858-43-1305
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/misasa/>

編集 NPO 法人健康と温泉フォーラム
東京都渋谷区代々木 4-59-3
電話 03-3320-8126 FAX 03-3320-0586
E-mail info@onsen-forum.jp
<http://www.onsen-forum.jp>

デザイン 株式会社 トゥー・アー・ティー
制作 福井県福井市御幸 4-11-9 3F
電話 0776-21-2082 FAX 0776-21-2083
E-mail info@to-a-t.net
<http://www.to-a-t.net>

発行日 2008年11月4日
©2008 printed in Japan (200)

PROGRAM

11月4日(火)

- 1300 開 場
- 1330 開会挨拶 森田 潔 (岡山大学病院長)
三友 紀男 (NPO 法人健康と温泉フォーラム会長)
吉田 秀光 (三朝町町長)
- 1340 全国の取り組み事例報告
1. 「温泉病院と地域連携—三重県四日市市」
川村 陽一 (医療法人社団主体会理事長)
 2. 「温泉病院と旅館の連携—宮城県鳴子温泉」 鳴子温泉の湯治文化に基づく温泉療養プラン
成川 弘治 (大崎市民病院鳴子温泉分院院長)
 3. 「長期滞在型リゾートの杜事業コンソーシアム」～産・官・学の好ましい「三角関係」～
小山 芳久 (山梨県北杜市コンソーシアム代表)
 4. 「三朝温泉活性化の取り組み研究」
大野 正人 ((財) 日本交通公社研究調査部研究主幹)
- 1500 基調講演 「温泉を健康と豊かさの源泉に」
平井 伸治 (鳥取県知事)
- 1600 パネルディスカッション 「温泉を活用した医療と地域の連携」
コーディネーター
合田 純人 (NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
- パネラー
- 「温泉大国・日本を世界の温泉治療のメッカに」
小嶋 光信 (両備ホールディングス株式会社社長)
- 「三朝町における医療と地域の連携」
吉田 秀光 (三朝町長)
- 「医療の立場で 三朝温泉における期待と課題」
光延 文裕 (岡山大学病院三朝医療センター長)
- 「医療と温泉」
御船 秀 (三朝温泉旅館協同組合理事)
- アドバイザー
- 川村 陽一 (医療法人社団主体会理事長)
成川 弘治 (大崎市民病院鳴子温泉分院院長)
小山 芳久 (山梨県北杜市コンソーシアム代表)
大野 正人 ((財) 日本交通公社研究調査部研究主幹)
- 1730 開会挨拶 清水 信義 (NPO法人ラドン温泉医療三朝会議理事長)
- 1800 交流レセプション (ブランナールみささ 宴会場)
- 2000 終 了

11月5日(水)

- AM 岡山大学病院三朝医療センター施設見学、ラドン蒸気浴体験、
国宝三徳山投入堂遙拝、三朝町温泉街など視察
- 正午 解 散